
鍋と人間関係

安藤ナツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鍋と人間関係

【Nコード】

N89370

【作者名】

安藤ナツ

【あらすじ】

鍋をつついて語る、『あなた』の人間関係。

戦前から建っているようなアパートの一室。狭い部室では、小さな二人用の土鍋が火にかけられている。土鍋に張られた水の中では、少々の鶏肉と、それを覆い隠さんとする白菜が大量に浮かんでいた。鍋とは人生の縮図だと、どっかの誰かが言っていた気がするが、この様子ではそれは嘘だろう。大木樹はそんなことを考えながら、ソファに制服姿のまま寝転がる彼女　由愛ゆめの名前を呼んだ。

理知的なメガネと、染めたこともなさそうな綺麗な黒髪の文学少女と言った風貌で、本人もそのキャラクターを理解しているのか、その手には文庫本が握られていた。ページは黄ばみが強く、随分と古い本を読んでいるようであった。

「ほら、由愛。食べよう。貧乏鍋だ」

炊飯器からご飯をよそいながら、樹は妙に嬉しそうに鍋を指さす。

「鍋好きだよ、樹」

そんな樹の様子に、由愛は文庫本を通学用のサブバックにしまい込みながら呆れた顔をする。

「そらそうですよ、鍋ですよ、鍋！」

そんな感じで、鍋は樹の好物だった。多人数で一つの物をつつくと言う、その独特な料理が樹は何よりも好物で、ことがあれば樹は鍋を食べたがるのだ。夏休みに文芸部のメンバー王毅の誕生日には、ケーキの代わりにキムチ鍋を用意するほど鍋が好きなのだ。その時は、お返しとして王毅から四十八の殺人技を貰えた。

しかも今回は、彼女と二人きりと言う、男子高校生垂涎の状況である。

「いいですよ、ね、鍋。ポン酢とゴマダレありますから、どっちでも好きな方で食べてください」

「樹って、料理好きな割には、手間暇かけないよね」

対する由愛はと言うと、そう乗り気ではなかった。ただ飯だし、

二人きりだし、嬉しくないことは全くないのだが、樹の作る料理に不満があった。

非常に簡素なものが多いのだ。基本、焼いてだすか、鍋にするかの二択なのだ。

「料理なんて好きじゃあないですよ。俺は食べるのが好きなんです。料理なんて下らない。肉食べるのにどんな技術がいるって言うんですか」

樹は悪びれる風もなく、由愛にご飯をよそったお椀を渡す。

樹が好きなのは『鍋を食べる』ことであり、『鍋』自体ではない。味にも特別な興味はないし、料理すると言う行動も別段好きでも嫌いでもない。

事情あつて殆ど一人暮らしみたいな樹だが、そんな心持だから料理技術が上がることは一切なかった。

「素材の味を生かすのも大切だよな」

どうやら、根本的に料理をする気がなさそうな樹の説得は諦めて、由愛は肉と白菜を誉めることにしておいた。こっちは反論も何もしないので、誉めるのも貶すのも簡単だった。

二人はちゃぶ台の上の鍋を挟むように座って、両手を顔の前で合わせる。「いただきます」と声を合わせた。

「白菜多いわね……」

「鍋の白菜って美味しいじゃあないですか。じゃんじゃん食ってください」

そう言つて、樹は次々と白菜を鍋から取り出して由愛の持つ皿に入れて行く。少なからず入っているはずの鶏肉は、一欠けらも入ってこなかった。

そのくせ、樹の皿の上にはしっかりと鶏肉がごろごろと入っているのだから、由愛は大きく声を出して怒った。

「あんたは独裁者か！ 私にも肉をよこせ！」

「冗談だつて」樹は笑つて、肉の乗った皿を由愛に渡す。「はい、どうぞ」

「ん。苦しゅうない」

満足そうに由愛はそれを受け取って、樹に微笑み返す。ただ、メガネが湯気で曇っていて、可愛いと言うか、完全に間抜け面だった。樹はそれを見て、「可愛いな」としか思えない自分は幸せな人間だと再認識した。

金はあまりないし、背格好も並だし、成績は下の下程度だが、こんな可愛い人が彼女ならば全然問題なかった。

「やっぱり幸せは基本的に人間関係に依存するよね」

「誰に向って話してるの？」

「いや、まあ、シリーズの三作目だけど、キャラクターにブレがない事を主張しとかないとね」

「何それ？」

電波な発言に首を傾げて、由愛は箸で掴んだ白菜をポン酢に付けて口に運ぶ。一口二口と白菜を口に突っ込み、由愛は満足そうにご飯をよそったお椀を手取る。

白菜（ポン酢）。ご飯。白菜（ゴマ）。肉。肉（ゴマ）。
ご飯。白菜（ゴマ）。

黙々と無心に由愛が鍋を食べて行くのは満足そうに眺めながら、樹もゆつくりとご飯に手を付ける。それだけでお腹一杯と言った様子だった。樹は「何を食べるよりも、誰と食べるか」と言う科学的根拠の薄そうな言葉が大好きだった。

「それにしても、二人で食べる鍋はおいしいですよね」

本当にどうでも良いのだが、樹は作った料理を誉められたことがない。実の父親にすら褒められたことがない。だから、樹はいつも最初に自分の調理を誉めた後に、話を振る。

「しかし、毎度ながら一体全体何を読んでいたんです？ 由愛」

先日はやけに分厚い、そして嫌に恐ろしい内容の本を読んでいた。今日、今日の文庫本もそんな恐ろしいものではないかと言う怯えが少しだけあった。

パクパクと肉を食べる由愛の様子を見ながら、その肉は何処に行

くんだらうと思うが、多分、胸だ。間違いないと、樹は深く頷く。
「何見てるの？」小動物のように樹の瞳を覗き込んで、由愛は「坊
っちゃん」と答えた。

「『坊っちゃん』？ っっていうと、芥川龍之介？」

「夏目漱石だよ。そこは一般常識的に知っておいてよ」

少しだけ不安そうな表情で、樹の間違いを正す由愛。芥川龍之介
と夏目漱石なんてどうやったら間違えるんだと、由愛は憤慨する。
が、樹は漫画以外読まないことは知っていたので、樹にそれ以上何
を言うこともなかった。

鍋の中を泳いでいた白菜を拾い上げながら、坊っちゃんの内容を
説明する。

「主人公の坊っちゃんは、東京から教師の仕事の為に、田舎に行く
の」

簡単に説明するにはいささか登場人物が多いし、人間関係も複雑
で、その人間性が多様であり、そう短い話でもないので難しい。が、
それ故に人気のある作品であり、一般教養として読んだことのある
人間も多いだろう。

もちろん、漫画しか読まない樹がその内容を知っているわけもな
く、以前に何度か読んだことがある由愛とは言え、その説明には大
変骨が折れた。

「へー、渾名を付けるんですか」

が、その甲斐虚しく、樹は比較的どうでも良い所に眼を付けた。

「山嵐に、うらなり。狸に赤シャツ。なるほど、面白いですね」

「まあ、確かに、渾名は『坊っちゃん』でも面白い所だと思つよ。
その人に合ったユニークな名前を付けてるのは」

二人して白菜を齧りながら、『坊っちゃん』について語る。傍か
ら見れば頭の良さそうな会話にも思える。

「いやいや、渾名って言うのは『人間関係』において重要ですよ。
呼び名って言うのは大切ですからね」

が、実際は樹の妄想が漏れ出しているだけなので、救いようがな

い。

「渾名って言うのは特別だからね。私のこと『ゆーにゃん』って呼んでいいよ」

「それでですね、ゆーにゃん。坊っちゃんの渾名って、悪意があるじゃあないですか」

「んん？ 悪意？」

それは違う。と、由愛は思った。坊っちゃんはそう言う人間ではないと、長い間感じていたからだ。小さなころは、坊っちゃんが付ける渾名が面白くて、学校の友達と渾名を付けあうのが流行ったくらい、悪意と無関係な物だと思っていた。

「説明が悪かったかな？ 多分、坊っちゃんはそんなニュアンスでは渾名を付けてないと思うけど」

「俺も読んでないんで、偉そうなこと言えないけど」少しむっとした由愛の表情を見て、慌てて樹はそう付け加えた。「明らかに、『狸』や『うらなり』は褒め言葉じゃあないですよ。それって、どう考えても相手を見下していると思うんですけど」

「……そりゃあ、田舎ものって馬鹿にはしてたけど」

言われてみれば、確かにそれは悪口だ。

あまりにも堂々とした物言いと、面白い言葉のチョイスに、子供時代は思っていたが、坊っちゃんは確かに見下していた。しかも坊っちゃんは明確に自分の正義を語っていたのが上手いとしか言えなかった。

「坊っちゃんは、渾名を付けることによって、自分は彼らよりも上だって思ってたんじゃないですかね？ これが、面白いと思うんですよね」

樹は絶滅危惧種となりかけている鶏肉を少しと、駆除が必要なくらいの白菜を自分の皿に取る。どうやら、さっぱり味が好きなようで、ポン酢を付けて美味しそうに白菜を口に運んでいた。

「名前なんてタダの記号だなんて言う人もいますけど、まあ間違いない記号でしかないんですけど、そこには絶対に誰かが付けたって

事実があるんですよね。これはもう、絶対の人間関係ですよね」

名前を付けられた事実。自分の記憶がない時から、いやいや下手をしたら生まれる前、お腹の中の時点で、名前を付けられていると言ふこと。

名付け親。と言ふ言葉があるくらい、名づけると言ふ行為は重要だと樹は言ふ。

「なるへそね。確かに、誰かに名を付けるって言ふのは優越感があるかもね。それと同じくらい、渾名で呼ぶっていうのは特別なわけ？」

ちやぶ台に置かれたポットから自分のコップにお茶を注いで、由愛は微妙な表情で相槌を打つ。やはり、この一見は思ふ所があるようである。

「そうそう、俺が言いたかったのは、『相手を呼ぶ時に使う言葉』についてですよ」

少々強引だが、話を違う方向に引つ張って行く樹。言いたかったも何も、坊っちゃんの話だったのだから、話したいのは坊っちゃんについてに決まっているのだが、樹は本を読まなくても、空気の読める少年ではあった。

「日本語って、やたら相手を呼ぶ時に使う言葉が多いじゃあないですか。二人称にしたって、沢山あります。えーっと」

「うーんと、『あなた』『お前』『君』『貴様』『汝』とか？」

小さな口にこれでもかと白菜を詰め込んでいた由愛が、それらをまとめて呑み込んですらすらと答える。大したことは言っていないのだが、全くと言っていいほど本を読まない樹にはそれが偉業に思えたらしく、手を叩いて褒め称えていた。

「そんな感じですよ。『あなた』なんて漢字にすると『貴方・貴男・貴女・彼方』って携帯変換だけでも四パターンも出ますからね。これは多分、他の国にはない特徴じゃあないですか？」

「かもね。英語版の『坊っちゃん』じゃあ、渾名で言うべき所も大抵ミスター誰々ってなっていたし。普通に翻訳された文章は、『あ

「あなた』『お前』『君』『貴様』『汝』だろうと、なんだろうと、『You』ってなってるわね」

「英語の本とかも読めるんですか？」

「さらっとした由愛の台詞に、樹は大袈裟に驚いて見せる。ご飯がなくなりかけたお椀を落としそうになるほどだ。」

「たまに英語で題名が書かれた本を読んでいるとは思っていたが、まさか洋書にまで手を出していたとは思わなかった。思い返してみれば、携帯電話片手に本を読んでいたから、わからない単語を翻訳していたのだろう。」

「凄いな、ゆーにゃん。俺なんてアルファベット順に歌えないですよ」

「アルファベットを曲に乗せないとダメな言い方って言う時点で高校生としてどうかと思うのに、それが言えないってどういうことよ」

「想像を絶する回答に、由愛の持つ箸が初めて動きを止める。今日、小学生だってその歌は歌えると思う。」

「樹は恥ずかしそうに頭を掻いて、「途中でわからなくなっちゃっんですよ」と答えた。」

「何処よ、歌ってみて」
「一体、あの単純な歌を何処で間違えると言っただろうか？ 由愛には不思議でたまらない。別に秀才キャラを売るわけではないだろうが、どこで詰まるかが全く理解できないようだ。」

「そんな由愛の表情をどう思ったのか、樹は箸をおいて真剣な表情で歌い始めた。」

「すいへいりーべーぼくのふね。なまがるしつぶすくらーくか……」
「うおい！」樹の大ボケに、由愛は生まれて初めてずっこけた。座っていたのにずっこけた。

「初めて見る可愛い先輩の動作に瞳を奪われながらも、樹は「何処か間違っていました？」と首を傾げる。」

「何処も彼処もってか、森羅万象違っじゃん！ かすってもない。それアルファベットじゃあない！ 元素記号の周期表！」

「ええ！ じゃあ、『りあかーなきけーむら』はこの続きじゃないんですか？」

「炎色反応！ 全部科学じゃん！ 順番に言えないって言うか、ABCで始まらない時点で気が付くでしょ！」

「ええ？ ABCって、アガサ・クリステイ小説じゃあ」

「本読まないのに何でそんな推理小説知ってるの？」

「冗談はさておき……」

「どっから？ どっからが冗談なの？ お願い教えて！」

「『すいへいりーべー』からです」

「アルファベットは言えないのか」

由愛が落胆と同時にちやぶ台を叩くと、ポン酢の空瓶が倒れて、畳の上に落ちた。同じくらい、彼女の気分も落ち込んでいた。まさか、自分の好きな人間がここまで世間知らずだとは。

樹の父親が借りているこの部屋の大家からは「気が利く子」と言われ、学校でも「真面目で良い人」、由愛の両親に至っては「娘を安心して預けられる」と評されている樹だったが、もしかしたらそれは遠回しに馬鹿にしていたのかもしれない。そんなことを由愛は本気で思ってしまった。

「それで、二人称で特に面白いと思うのは『あなた』ですね、やはり。日本語は面白い」

そんな由愛の気心も知らずに、樹は持論を続ける。

「『あなた』って他人行儀のようであって、凄く親密な人間関係を臭わせる言葉です」

少なくとも『You』と『あなた』は、決して簡単に『』で結べる言葉ではないと樹は考える。

「例えばですよ、『あなたの好きな料理はなんですか？』の『あなた』と、『あなた。何処にいるの？』の『あなた』では全然意味が違くないですか？」

「うーん。前者は目の前の人間に使う『あなた』で、後者は誰かを想うての『あなた』ってこと？ 言われてみれば、後者は多分『Y

ou』では訳せない気がするね。うーん？ 英語だったら多分個人名が出てくる所かな？」

鶏肉を探し鍋の中を箸でかき混ぜながら、由愛は頭の中に英文を組み立てるが、『あなた』を『You』に翻訳するのは難しそうだ。尤も、英語なんて授業以外で勉強したことはないので、何とも言えないのだが。

「でしょう？ そもそも、ゆーにゃんは『誰か』って言いましてけど、『あなた』って言うのは、本当に特定の個人のことでしょうかね？」

「うん？ 『あなた』が二人称である限り、特定の誰かを指しているんじゃないのかな？」

「そうですか？ 俺としては『あなた』って言葉には、もっと大きなものを見ている気がするんですよ」

酷く抽象的なことを、樹は自信満々に言い切った。その後の言葉は考えていないのか、鍋をつつく作業に戻ってしまった。

基本的に大雑把な性格の樹は、『思い切ったら即日』と『親がなくとも子は育つ』を信条としているのか、基本的にやったらやりっぱなし、なるようになるという言葉を体現したような男だ。他人の悩み相談を趣味のように行っているのだが、やはりその成功率も五割を切る程度だった。

何が言いたいかと言うと、重要なことは恋人の由愛や、文芸部の部長たる王毅が苦労しないといけないということだ。

「どう言うこと？ 樹は、『あなた』にどんなニュアンスを持っているの？」

由愛は悠長に白菜を食べる樹に問う。今回の『あなた』論は別に誰かに迷惑がかかるわけでもないのだから、放っておいても問題はない。問題はないが、まめな性格の由愛は頭を抱えてしまう。意味深なことを言うだけ言っておいて、その説明をしない樹を信じられないと言う目で見つめるしかなかった。

「どんなって、そもそも、目の前にいない人間を指していないのに

『あなた』を使えるってことは、『あなた』は英文的な二人称ではありえないじゃあないですか」

「うお、正論っばい。たしかに、『あなた』は特別なニュアンス…敬意みたいのが感じられるよね」

「少なくとも『お前』や『貴様』よりも『あなた』は随分敬意を感じる言葉だ。」

いや、『貴様』は元々目上の男に使う言葉であつたが、いつの間にかその使い道がひっくり返ってしまっているのだが。それもそれで、権力者が言葉を使って『人間関係』をひっくり返したと言つ、ドラマのある話ではあるのだが。

「じゃあ、その敬意は一体何に対しての敬意かって話なんじゃあないですか？ いや？ 俺はあの敬意を『あなた』と呼んでいるのかな？」

「樹はさ、それで納得できるかもしれないけどさ、私に説明する為にもっと詳細を詰めてくれない？」

「いやー、思いつきで喋っているだけなんで、難しいですね。漠然としたイメージはあるんですよ？ でも、自分の心情を言葉にするなんて難しい。これが簡単に出来るなら、俺はもっと簡単に生きていけますよ」

いつもと同じ、樹の言葉に安心しながらも、由愛は頭を捻らす。

樹は完全に納得してしまっているが、由愛はまだまだ、『あなた』が単純に二人称ではないと言つ意味がいまいち理解できていない。

「その敬意？ って何なのよ。個人に対する敬意じゃあないってことでしょ？」

まず、ここから意味が分からない。

敬意を表するのは、『個人』に対してではないだろうか？

「そんなこともないか」独り言のように由愛は呟いて、かぶりを振る。「敬意は、個人の功績に送られるものだもんね」

うんうんと、一人納得する由愛。樹はその様子を微笑みながら眺めて、席を立つ。追加の白菜と鶏肉を台所から持ち出して、鍋に乱

暴に落とす。少なくとも、鶏肉に敬意は感じていないようだ。

「なんだ、まだ肉あるじゃん」

「白菜もありますけどね。っていうか、ネギも大根も豚肉も人参も椎茸もあるけど」

「出そうよ。この寂しい鍋に彩りを足そうよ！」

「今回は『貧乏鍋』ですから。こだわりですよ、こだわり」

『人間関係』やら『あなた』やら『具の少ない鍋』やら、樹のこだわりほど理解が難しいものもない気がする。こないだは何を言っていたっけ？ そう『痛んだ良心』とか言っていた。

鍋の火を少し強めながら、樹はまだ茹で上がっていない白菜を生で齧る。

「それで、俺は『あなた』って言葉に『敬意』を感じている所まではわかりましたけど、一体『何』に敬意を感じているんですかね？」

「他人ごと？ おかしくない？」

とことんマイペースな男であった。

「いいけどさ、私は出来る女だからね。後ろをひっそりについてくよ。取りこぼしたものは拾ってあげるし、足りないものは持ってきてあげるよ」

「いやはや、幸せですね」

箸をクワ手、茶化して見せる樹。

自分の放った何気ない一言でここまで頭を悩ませてくれるとは、樹は思いもしていなかった。が、中々悪くはない。本当に自分は幸せ者だ。

「多分、『あなた』って言う言葉の指す『敬意』は、歴史みたいなもんじゃあないかな？」

「歴史？」

由愛の予想外の切り口に、樹は興味深そうに白菜をすくう手を止める。ベジタリアン気取りではないが、白菜は生でも美味しいことに気が付いた。

そして『歴史』と言う言葉は一体何を意味するのだろうか。

「うーん。歴史って言うのも正しくないかな？　なんて言うのかな？　『あなた』が二人称じゃあないと言うとんでもない仮定を前提とすると、渾名を適当な単語に翻訳できないとしたら、敬意を含めた単語であるとしたら、そう言うのも面白くない？」

「少しずつ言葉をまとめながら、由愛は箸を置いて呷く。

「続いてきたって、歴史。続いて行く、って歴史」

その一言に、樹は首を傾げる。

言い出しつpegが言うのも何だが、『あなた』に、樹はそんな深い意味を感じたことは一回もない。単純に『二人称なのに本人が目の前にいないときにも使うのが不思議だな』程度しか思っていないかった。何となく、面白い『人間関係』がありそうだなと思っただけだった。

「『こんにちは赤ちゃん』の詩だったり、『いのち、響きあう』だったりするけど、赤ちゃんに『あなた』って呼びかけているの。後者なんて『お腹の中の子供』ってこれって、『あなた』は二人称であり尊称でもあるのにおかしくない？」

「それは確かに、妙ですね。目の前にいない人間、しかも全く歴史的背景のない尊敬すべき点がない人間に、『あなた』を使うのは変ですね」

そんな題名の本は寡聞にして聞いたことはないが、由愛が言うのだから存在しているだろうし、本当に書いてあるのだろう。樹は鍋の中の鶏肉をつつきながら話の続きを待った。

「でしょう？　そして、赤ちゃんに対して敬意を感じ取れる所って、何処だと思っ？」

「そりゃあ、普通に考えて、産まれてくれることじゃあないですか？」

「そうそう。自分の代わりに続いてくれるって言うことね。そこに敬意を込めたってこと」

「盛り上がっている所悪いですけど、そんな生命の流れなんて『あなた』って言葉には全然感じませんか？」

樹は首を捻って、由愛の言葉に疑問を抱いたことを主張する。

「そう?」

持論を否定されたのにもかかわらず、少しも残念そうな表情をせずに由愛は立ち上がると、樹の横に腰を下ろす。

そして、

「『あなた』」

樹をそう呼んだ。耳に息を吹きかけるように、優しく呼んだ。

たったの一言だが、樹は顔を赤くしながら、「なるほど」と思った。

この『あなた』は想像力を膨らませる。これからを想像させる。ただ、誰かを呼ぶだけではない意味が、あるような気がした。

それはやっぱり気のせいかもしれないし、思い違いかもしれないが、深い人間関係を見た気がした。

「あなた、大好きよ」

ああ、幸せだな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8937o/>

鍋と人間関係

2010年11月13日19時43分発行